

クリスマスローズの栽培と種子増殖

目次

- 1 生育の仕方
- 2 育苗（1～2年苗）
- 3 鉢栽培（3年株以上）
- 4 地植え
- 5 種子の採り方と保存
- 6 播種と幼苗管理

1. 生育の仕方

クリスマスローズはキンポウゲ科の宿根草で、根量が多くて地中深くまで伸長するため、冬の寒さの中でも旺盛に生育する、丈夫で育て易い植物です。

10～12月と3～5月はクリスマスローズが最も好きな季節で、活発に根を伸ばし、生長点を充実させ、栄養を根に蓄える充実した時期です。この時期には日光が必要で、肥料や水も盛んに吸収しますので、それに対応した管理が必要です。

1～2月の低温期は寒さに耐えていますが、マイナス5℃位までは平気で過ごせます。（野生種の仲間、特に *H.lividus* は少し寒さに弱いようです）。寒い冬の期間は、春の元気な生育に向けた充電の時期でもあります。寒いだらうと屋内に入れたりするのは厳禁で、防寒対策も必要ありません。

6月から9月初めまでの夏の期間は、生育をストップしてじっと耐えている時期であり、出来るだけ涼しい環境でそっとしておく必要があります。日向に置いたり、肥料をやったり、植替えたりすることは、クリスマスローズにとって耐えがたい苦痛となります。この時期の水やりは午前中を避けて夕方にし、量も控えめにします。

日本の夏の高温多湿の環境は大変苦手で、クリスマスローズを枯らしてしまうのは、大抵、夏の過湿で根を腐らせてしまうからです。クリスマスローズは乾燥には比較的強い植物で、多少萎れるくらいは平気です。

種子から発芽した苗は、年に2～3枚の葉を出しながら成長し、充実した生長点を形成すると共に、次第に地下に根茎を充実させていきます。発芽2～3年後の成熟した生長点には、夏の高温が刺激となって花芽が形成されるようになります。この花芽は、次の早春に花枝として花を咲かせ、開花が終わった花茎は役目を終えて自然に枯れていきます。

地下に形成された根茎には生長点が沢山あり、開花中の花茎の周りの根茎上では既に次世代の生長点が2～3個生長していて、4月になるとそれらの生長点から一斉に若い葉が勢い良く伸び出てきます。この新しい葉で作られる栄養分によって、根茎や根が充実し、株が生長していきます。

生育する環境さえ良ければ、このようにして毎年どんどん株が新しく大きくなり、数年もすると50～100個の花を咲かせることが出来るようになります。

1株に着く花の数が多いことは、その株が良い生育環境で育ってきたバロメーターなのです。

2. 育苗 (1~2年苗)

育苗の基本は、根を元気に丈夫に育てることです。
根が元気で丈夫であれば、地上部は自然に元気に育ちます。
生育中の根は活発に呼吸をしています。適度な湿度も必要です。
通気性が良く、保水性のある土を使うことが育苗の決め手です。
あとは適度な日当たりと風通しです。肥料はおまじない程度で十分で、やり過ぎは禁物です。

ホームセンターなどで売っている

1年苗 (3~4号ポット入りで小さい葉が3枚くらい着いている) や

2年苗 (4~5号ポット入りでやや大きめの葉が2~3枚着生) は、

入手後出来るだけ早く(季節に関係なく) 1~2周り大きな鉢に植替える必要があります。
植える土は、1年苗は下記の肥土A、2年苗は肥土Bなどを使用すると良いでしょう。
若い苗は生長が早いので、秋9月と春3月の年2回、一周り大きい鉢に植替えます。

植替えの仕方は、今まで植わっていた鉢を逆さまにして取り除き、根が廻っていたら少しほぐして、株上部の土も少し落として、新しい土に植替えます。このとき、葉の付け根(生長点)が地上に出るように、やや浅めに植えるのがコツです。深植えはその後の生育が悪くなるので止めましょう。

植付け後たっぷり水やりして、明るい日陰で2週間ほど管理します。その後は、10~5月は日当たりの良い場所で、6~9月は明るい日陰の涼しい場所で管理します。年間を通して西日には当てないように管理します。

水やりは、生育期間中は土の表面が乾いたらたっぷりやりします。鉢が小さいうちは乾き易いので、晴天の日や風のある日は注意しましょう。休眠中(6~8月)の水やりは控えめにします。

土の表面だけを湿らせるような簡単な水やりの仕方は、地表面だけが湿って鉢底が乾いている状態を作り出し、苗の根が水分を求めて表面にばかり集まって、少しの乾燥でもすぐに萎れるという軟弱苗が出来てしまいます。根は地表面ではなく、鉢底にしっかりとほこらせることが大切です。

苗の葉色が薄い場合は肥料不足が考えられるので、1年苗には液肥(1,000倍)を月1回程度、2年苗には固形油粕を、春と秋に1株1個づつ置肥えします。

休眠中(6~8月)は肥料を与えてはいけません。

1~2年苗は、株を充実させるため、年間を通して葉は切除せずに着けておきます。枯れてきた下葉と、横に寝てきた下葉のみを地際部から切除する程度とします。

	肥土A	肥土B	肥土C	
赤玉土(小)	3.5	3	2	
赤玉土(中)	3.5	3	3	☆ 通気性が更に必要な場合(野生種系統など)には、これらの他に薫炭などを少量混ぜると良い
赤玉土(大)		1	2	
完熟堆肥	3	3	3	
マグアンプ	小粒少量	中粒少量	大粒少量	
化成肥料	少量	少量	少量	
液肥(1,000倍)	保湿	保湿	保湿	

3. 鉢栽培（3年株以上）

3年以上の株の管理は、基本的には上記1～2年苗と同じですが、使用する土は粗めの肥土Cを用います。

植替えは、3年株は年1回、秋に一周り大きい鉢に植替えます。4年以上の株は、2年に1度程度、秋に植替えると良いでしょう。鉢は一周り大きな鉢か、同じ大きさの鉢でも構いません。古い土を半分程度落とし、腐った黒い根を丁寧に取り除いてから、新しい土に植替えます。鉢は底穴の多い通気性の良いもの(菊鉢など)を使います。

根が廻っていて固くなっている場合は、鉢を外した後、根鉢を横に寝かせて上から抑えつけながら、根っこごとゴロゴロと転がしていると、少しずつ根が解れてきます。無理に根を広げて傷つけないようにしましょう。

鉢の置き場所は、年間を通して1～2年苗と同じですが、鉢が大きいので、時々日当たりの方向を変えてやりましょう。いつも同じ向きでは鉢内の根が偏って分布してしまいます。

また、鉢底が直接地面やコンクリートの床に当たらないように、鉢と地面の間に隙間を適当に作り、鉢底の風通しを良くしておきましょう。鉢底から地面に根が張るのも防げます。

年間を通して、赤外線が多い西日には当てないように気をつけましょう。ほとんどの植物は西日を嫌います。反対に、紫外線の多い朝日は、植物にとっても動物にとっても有益です。

生育期間中(10月～5月)の水やりの基本は、「出来るだけ間隔をあけて、やる時はたっぷりやる」のが原則で、毎日少しずつやるのは良くありません。鉢内に水が溜まるくらいの量をやりますが、その水が下に降りていくときに、土の中の悪い空気を追い出して、新鮮な空気を引っ張り込んでくれるので、根に十分な酸素を供給することが出来るのです。

鉢ものの水やりは、根に酸素を供給するのだと思ってたっぷりやる癖をつけましょう。その代わり、水やりの間隔はしっかりと乾くまで充分に開ける必要があります。鉢土は、常に湿っているよりも、湿ったり乾いたりを繰り返す方が根の生育には都合が良いようです。すーと水が引いていかないときは、土の通気性が悪いので、新しい土に植替える必要があります。

休眠中(6～8月)の水やりは午前中を避けて夕方にし、回数を減らして乾燥気味に管理します。

肥料は、春と秋に固形油粕を置肥えしますが、6号鉢で2個、7号鉢で3個、8号鉢で4個程度とします。化成肥料などの速効性の肥料は苗の時以外は使いません。

鉢栽培の大株(4年株以上)は、花立ちと花の見栄えを良くするため、12月に古い葉を株元から全て切除します。3年株は株充実のため1～2枚の葉を残した方が良いでしょう。

株分けは、基本的にはしない方が良いでしょう。開花6年以上の株で、中央が枯死して周りの方ばかりが生育する状態で、増殖する価値のあるもののみ行うようにしましょう。株分けが可能な時期は、10月のみとってください。

大株の植替えと同様、鉢土を崩して絡まっている根を丁寧に解していきます。古い土は完全に取り除きます。腐った黒い根は取り除き、白っぽい生き生きした根を大切に残します。

株全体を見て、切り離れた子株に生長点(芽)が3つ以上残るように見当をつけて、根と芽を切り落とさないようにハサミで分割します。これらの作業中、根を乾かさないうち注意します。

新しい土で丁寧に植付けます。充分水やりした後、明るい日陰でひと月ほど管理します。その後、10～5月は日当たりの良い場所で、6～9月は明るい日陰の涼しい場所で管理します。

肥料は翌年の3月に固形油粕を置肥えします。

株分けすると1～2年は花が咲かないことが多いようです。株分けは、クリスマスローズにとっては大手術なのです。

4. 地植え

地植えで大切なポイントは、「植える場所の環境がクリスマスローズの生育の仕方に合っているかどうか」という点です。秋から春にかけての日当たり、夏の涼しさ、土壌の通気性と排水の良さなどは、クリスマスローズを地植えする場合の必須条件といえます。

秋から春にかけての日当たりを、城東公園を例に考えると、10月と5月は木陰になって日光不足で心配ですが、11月から4月の間は落葉樹の間から差し込む日光が十分に得られる好ましい環境といえます。秋から春にかけての日当りは人工的にコントロール出来ないので、地植えする場合に考慮すべき要因の中でも最も重要なものとなります。

夏の涼しさについては、城東公園は全く問題がなく、満点と言えるでしょう。地植えしたい場所で涼しさが得られない場合には、植木やよしずなどで日陰を作り、風通しを良くして少しでもストレスを取り除くように工夫しましょう。

土壌の通気性と排水の良さは、城東公園で地植えする場合には最大の問題点となります。何十年も生育してきた落葉樹の根が、縦横無尽に張り巡らされてカチカチに固まっている場所が多く、クリスマスローズの根が伸びる余地はほとんどない状態です。

クリスマスローズを10年先、20年先まで健全に咲かせるためには、それに見合った根を張らせるだけの土壌スペースが必要となります。1株当たり最低直径40cm x 深さ40cmの穴を掘り、この穴を植木鉢に見立てた土づくりをしたいと考えています。落葉樹の根や石ころを取り除き、落葉堆肥と緩効性肥料(マグアンプ大粒)を加えて混和し、新しい土壌(一度鉢栽培に使用した土)を客土して植付け穴を準備したいと思っています。

植え穴の間隔は、手前の側溝から50cm入った所で左右70cm間隔にとり、将来2列目を植える場合には、1列目の株と株の間の奥に配置出来るようにしたいと考えています。準備した植え穴には割り箸の目印を立てておきます。

株の植付けは、9月中旬から10月にかけて行います。この時期に植付ける場合には、根鉢を多少崩して、下の方の根をばらして少し広げて植え付けるとその後の活着が順調にいきます。

目印のある植え穴に適度な穴を掘り、穴の中央部を少し高くしてその上に根を広げて根鉢を置きます。この時、深植えにならないよう少し高めにしておきます。

根鉢の周りに八分目ほど土を入れた後、ジョウロの蓮口を外して少し高い位置から、ジョウロ1杯分の水を勢いよくたつぷりと周囲に注ぎ込みます。これは、根と土とを密着させる効果があるばかりでなく、地下水が毛管現象で上がってくるように、新しい土と元の土との間に空間を作らないために行うものです。

根鉢の周囲に水が溜まっている内に、残りの土をかぶせて株が少し高くなるように寄せておきます。寄せた土は絶対に抑えつけないように注意します。

最後に、ジョウロの蓮口をつけて柔らかく十分に水やりします。地植えの水やり作業は、特別な事情が無い限りこれ以降ありません。以後は自然の降雨のみで育てます。

古葉の切除は、城東公園の地植えでは株元を踏みつけられないように、目印のため1株2~3枚を残しておきます。残した葉は4月の花茎切除の時に一緒に取り除きます。

5. 種子の採り方と保存

クリスマスローズの種子は、放任していても自然に出来る場合もありますが、人工的に受粉(雌しべの先端に花粉を着ける)した方が確実に充実した種子が得られます。八重の個体では、自然に種子を着けることが少ないので、人工的に受粉することが必須条件となります。

同じ株の花粉を雌しべに付けて種を採ることを「自殖(セルフ)する」といいます。他の株の花粉を雌しべに付けて種を採ることを「交配する」といいます。その場合、自分の花粉が混じらないように、予め自分の花粉を除いておきます。

このように種子を確実に採るためには、雌しべの先端に花粉をたっぷり付けてやりますが、雌しべの活性が良いのは、開花直前の蕾の頃から開花後3日くらいまでの間です。花粉の活性が高いのは、葯が裂壊してから数日後までの間です。大切な種子を採種する場合には、この時期を逃さないように受粉することが大切です。

自分の種子を採る(自殖する)場合には、先に咲いている自分の花の花粉を取ってきて、開花直後の花の雌しべの先端に付けてやります。雌しべは2～数本あるので全ての雌しべに同じ花粉を付けます。受粉した花にはラベルを入れたお茶パックの袋をかぶせて、ホッチキスで留めておきます。ラベルは白いプラスチック製のものを用いて、鉛筆で種子の名前を書いておきます。マジックインキは1年経つと消えてしまいます。

他の株の花粉を付けて雑種の種子を採る(交配する)場合には、自分の花粉が付かないように予め自分の花粉を除いておく(除雄する)必要があります。除雄は開花直前の、花粉がまだ出ていない蕾を対象に行います。蕾の花びらを丁寧にひっくり返し、中にある50～100個の葯(花粉が入っている袋)を1つ残らず丁寧にピンセットで取り除きます。その際、中央にある雌しべとその基部にある莢を傷つけないように、慎重に作業します。

全ての葯を取り除いたことを確認した後、花粉親の花粉を雌しべの先端にたっぷり付けてやります。雌しべは2～数本あるので全ての雌しべに同じ花粉を付けます。受粉した花にはラベルを入れたお茶パックの袋をかぶせて、ホッチキスで留めておきます。ラベルは白いプラスチック製のものを用いて、鉛筆で交配した母親と父親の名前を書いておきます。例えば、F1(A x B)と書きます。最初のF1は、「交配第1世代」の意味です。()の中が母親名 x 父親名です。

受粉後、約2か月すると種子が完熟して莢が割れてきます。そうすると莢からお茶パックの中に種子がこぼれてきますので、種子が乾燥する前に袋ごと切り取って、莢や花びらを取り除いて種子とラベルのみを袋に入れて、こぼれないようにクルッとひっくり返してフタをしておきます。

種子の入った袋は土の中に埋めて、乾燥させないように保存します。

種子は、一度乾燥してシワシワになると、2～3年は発芽しないとされていますので、丸々と太った状態のまま取り扱います。

クリスマスローズの種子は、そのままではすぐには発芽しません。自然状態では、夏の暑さを経た後、冬の低温に遭遇して初めて発芽が可能になります。その場合、発芽は2月から3月頃になります。

人工的に発芽を早めるには、湿ったままの状態、20℃以上の温度に2ヶ月間、その後5℃の低温に2ヶ月間遭遇させると発芽が可能になります。この場合、発芽は11月から12月となり、自然状態よりも2～3か月早く発芽することになり、その分生育も早まります。

6. 播種と幼苗管理

収穫した直後の種子は、発芽抑制物質を含んでいて、そのままでは発芽しません。湿った状態で高温の期間と低温の期間をそれぞれ2か月以上経ることによって、発芽抑制物質が無くなり発芽が可能となります。

収穫直後から7月末まで、自然の気温下で土の中に袋ごと埋め込んでおき、乾燥しないように管理します。

7月末に土から取出して袋ごと水洗し、ビニール袋に入れた湿らせたパーミキュライトの中に入れて軽く封をします。このビニール袋ごと冷蔵庫の野菜室に2ヶ月間保存しておく、発芽が始まり白い根が見え始めます。この種子を土に播きます。

播種床は、4号ポットに肥土 A を7分目ほど入れ、その上に赤玉土小粒を1cm ほど敷いて軽く水をやっておきます。この上に種子を10粒ほど広げて置きます。その上に赤玉土小粒を1cm ほど覆土して軽く押さえ、しっかりと水やりします。

播種したポットは日当たりの良い暖かい軒下などで、乾燥しないように管理します。発芽するまで1～2か月かかります。ハウスやガラス室があれば、その中で育てた方が生育が早まります。

双葉が出揃った頃と本葉1枚が展開した頃に、液肥(1,000 倍)を与えます。ゆっくり、ゆっくりと生長してきますので、暖かく見守っててください。

本葉が2枚展開した頃には、根も分枝して長く伸びているので第1回目の植替え(鉢上げ)のときです。植替える苗ポットは2～3日前から乾燥気味にしておきます。土の水分が多い時に植替えると、土の重みで根を切ることが多いからです。

3号ポットに1本ずつ植えます。植える土は肥土 A を2～3か月寝かせたものか、もう少し細かい土でも構いませんが、肥料分の少ないものを使用します。作りたてなどの化成肥料の粒が残っている土を使用すると肥あたりで枯れることがあります。肥料不足は後から液肥で補えます。

植替え後2週間ほどは明るい日陰で、風が直接当たらない所で乾燥に注意して管理します。

この3号ポットで最初の夏を越しますが、夏の管理は1～2年苗の育苗と同じです。確保できる管理場所の中で、もっとも涼しくて目の届く場所に置いてください。このステージの苗は、ご主人から毎日声をかけてもらうことが、最大の喜びなのです。

9月の声を聞くと、どの個体も新しい葉を伸ばし始めます。この時が第2回目の植替えのときです。遅れないように4号ポットに植替えてやりましょう。下葉が枯れていたら取り除いてやりましょう。

夏の間には生育が止まった貧弱な個体がどうしても1割ほど出てきますが、そのような個体は後の管理が大変なので思い切って捨ててしまいましょう。

植替える土は、肥土 A を使います。

その後の管理は、育苗(1～2年苗)に準じます。